

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 (教育学)	氏名	関 承
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
論 文 題 目 中国語母語話者における日本語自・他動詞の習得研究 —中国語で可能標識が使われる表現を中心に—			
論文審査担当者			
主 査	広島大学大学院国際協力研究科	教授	佐藤 暢治 印
審査委員	広島大学大学院国際協力研究科	教授	黒田 則博
審査委員	広島大学大学院国際協力研究科	准教授	深見 兼孝
審査委員	広島大学大学院文学研究科	教授	高永 茂
審査委員	関西学院大学大学院言語コミュニケーション文化研究科	教授	于 康
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、中国語母語話者にとって母語との関係から習得が難しいと言われている日本語の自・他動詞の習得について、そのなかでも特に誤用が起きやすい中国語で可能標識を有する形式が対応する日本語の動詞（「入らない」「開かない」等）に焦点をあて、その習得過程を明らかにし、さらには誤用を防ぐための適切な指導法を提案したものである。</p> <p>本論文は八章で構成されている。第一章の序論では、研究の背景、目的、意義、研究方法、構成を述べている。第二章では、自・他動詞の分類に関する先行研究の問題点を述べ、「可能」の観点から自・他動詞を新たに八つに分類している。第三章では、動詞の八分類に基づき、中国黒竜江省A大学の日本語学部在籍する一年生から三年生を対象に実施したアンケート調査の方法を述べている。第四章では、アンケート調査の結果に従い、統計分析を交えつつ、有・無標識可能における有対自・他動詞の習得過程として従来から言われている「自動詞の習得が困難で、他動詞の習得が容易」という見方は習得過程の一端を示すに過ぎず、学習者は学習時間が長くなるにつれ、他動詞から自動詞への使用に切り替えができ、それは学年で示すと一年生から二年生の時期にあることを明らかにしている。第五章では、第四章で論じていない動詞の形態と習得の関係を論じ、自動詞と他動詞の対応が「-u / -eru」型と「-aru / -eru」型とでは後者の方が習得しやすいこと、自動詞の場合、とりわけ前者の形態を持つ型が習得しにくいといった点を明らかにしている。第六章では、有・無標識可能となる無対動詞の習得過程を論じ、有標識可能動詞の習得は中国語と日本語の構造が近いこと、過剰般化が少ないこと、教科書の記述の豊富なことにより促進されるが、一方無標識可能動詞の習得は対称的に中国語と日本語の構造が遠いこと、過剰般化が多いこと、教科書の記述が少ないことにより遅れることを明らかにしている。第七章では、中国語母語話者にとって最も習得が難しい無標識可能自動詞の指導法について、教科書の問題点を指摘した上で、初級の段階では有標識可能自動詞、中級の段階で無標識可能自動詞を導入するという導入順序を提案している。第八章では、結論と今後の課題を述べている。</p> <p>本研究は、中国語母語話者が日本語を学ぶ際に抱える問題点の重要性を理解した上で関連する先</p>			

行研究を消化し、応用言語学の一研究として精密な分析方法を用い結論を導き出していること、また今後の日本語教育に大きく貢献できる可能性があるものとして高く評価され、その研究内容は博士の学位取得水準を満たしているものと判断される。なお、本論文の主要な内容は学術論文6編（査読付きで単著）として公表済みである。

以上、審査の結果、本論文は、学位請求論文として独創性と確実性を兼ね備えており、博士（教育学）の学位を授与されるに値する内容の論文として認められる。